# 適性検査Ⅰ

注　意

1　問題は **1** のみで、**5ページ**にわたって印刷してあります。
2　検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
3　声を出して読んではいけません。
4　答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5　答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6　**受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

3 小石川 適性 Ⅰ

**1**

**文章1** と **文章2** を読み、あとの問題に答えなさい。

（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

## 文章1

これからまたしばらくのあいだ、私どもの周囲にはいろいろな花が咲いたり、飛び交う蝶の姿が見られるようになります。私が、多少普通の人よりもそういうものに関心を持っていることを知って、近所の子供たちが、時々虫などをつかまえて来て私にその名をたずねるのです。こんな大きな蛾がいたよ、おじさんこれなんていうの？　彼は少し手に負えないいたずらっ子で、うちの＊生垣の竹の棒を抜いて、野球のバットにしていたこともありますし、木のぼりをして枝を折ることも専門家です。その子が水色の、大きな蛾を一匹つかまえて来まして、その一枚の翅をつまんで私に名前をたずねるのです。「そんな風につまんでいるとばたばたあばれて翅の粉をみんな落としてしまう、蛾でも蝶でも、こういう風に持たなくちゃあ」そういって私はまず持ち方を教え、それからその蛾はオオミズアオ、あるいはユウガオビョウタンという名であることを教えます。どうも忘れそうなので、紙にその名を書いて渡します。この蛾の幼虫がどんな形をして、どんな植物の葉を食べるか、幸いにして私はそれを知ってはいましたけれども、彼はまだ小学校の三年生、ただ名前を知ればよいのです。というより、彼が知りたいと思ったのはその名前だけなのです。

「知識の獲得には、ある不思議な快さと喜びがある」という古い言葉がありますが、この＊平素はいたずらの専門家である彼も、確かに満足の＊色を顔に浮かべて帰って行きます。私は、こういう風にして幼いものから何かをたずねられた時、たとえ自分が手を離したくない仕事をしている時でも、＊少なくもいやな顔は見せないようにして、そうしてその名を知らない時、あいまいな時には、その子供と一緒に本をしらべるようにしています。

詩人の尾崎喜八さんが、昔、あの植物学者の牧野富太郎氏をかこむ植物同好会の人々と採集に行かれた時の文章に次のような箇所があります。それは、先生、これは何ですか、これは何と申しますかと、次々にたずねられる時牧野博士はそれを＊たちどころに説明されるのですが、それに続いて、次のような文章があります。「先生が日本の植物に対して百の名称を＊断ぜられるとしても、僕はただ先生の記憶の強大さ、知識の広さに驚くだけである。植物学者としての先生の大いなる＊カルテから見れば、それは当然の事のように思われる。しかし一人の＊可憐な小学生が――腰に小さい風呂敷包みの弁当を下げ、肩から小さい＊胴乱をつるした子供が、何か小指の先ほどの植物を探して来て、『先生これ何ですか』ときいた時、『これは松』といいながら、その子の頭へ片手を載せられた時の、あの＊温顔の美しさを僕は忘れない」

私はこの一節が非常に好きなのです。がそこには、知るということ、そのための人間どうしに通うあたたかいものが感じられます。ただ人間としてこれだけのものは知っておかなければならない。そういう気持ちで本を読んだり、学校へ通って勉強をする。それも確かに必要なことな

のですが、そこで、もし一方は教える他方はそれを教わるという関係だけならば、それは全く機械的なものになって、ついには試験のために勉強をするという、*今ではあたり前のことになってしまった現象も生まれて、知ることによって快さや喜びが伴って来るような、ごく素朴な姿があまり見られなくなってしまいました。私自身にしましてもそういう傾向は確かにあるのですが、自分の知らないことでも、もう誰かは必ず知っている、もっと手っ取り早いいい方をすれば、たいがいのことは本に書いてあると思ってしまって、特に知ろうとしないのです。さまざまの事典と名のつく本が出ることは、それに誤りがない限り実にありがたいことなのですが、これだけ手もとに持っていれば必要な時にその知識をそこから引き出せるという考え、これは案外恐ろしいことではないかと思います。昔の人は私たちより知識の持ち方は少なかったと思います。また、その知識も誤っていたことが多いかも知れません。*コロンブス以前の、大多数の人々は別の大陸があるかも知れないということは恐らく考えなかったでしょうし、このようにして人間の発見や発明が一般の人たちにも知識をふやしていったことも事実であります。しかし、(ア)知ることと、知らされることの違いを考えてみていただきたいのです。

（串田孫一「考えることについて」による）

〈注〉

生垣――あまり高くない木を植えならべて作ったかきね。
平素――ふだん。いつも。
色――表情。
少なくも――少なくとも。せめて。
たちどころに――ただちに。すぐに。
断ぜられる――きっぱりと判断なさる。
カルテ――本来は医師が用いる記録のカードのこと。ここでは、経験といった意味をふくむ。
可憐な――かわいらしい。
胴乱――植物採集などに用いる入れ物。
温顔――おだやかであたたかみのある顔。
今――この文章が書かれた、一九五四（昭和二十九）年当時。
素朴――ありのままでかざり気が無く自然なこと。
コロンブス――イタリアの航海士。ヨーロッパで初めて現在のアメリカ大陸にたどり着いたとされる。

## 文章2

教養の一つの本質は、「自分の頭で考える」ことにあります。著名な科学史家の山本義隆氏は、勉強の目的について「専門のことであろうが、専門外のことであろうが、要するにものごとを自分の頭で考え、自分の言葉で自分の意見を表明できるようになるため。たったそれだけのことです。そのために勉強するのです」と語っています。この当たり前のことが、案外置き去りにされている気がします。

「自分の頭で考える」際には、「腑に落ちる」という感覚が一つのバロメーターになります。本当に自分でよく考えて納得できたとき、私たちは「腑に落ちる」という感覚を抱きます。この感覚は大変重要です。

ところが、「腑に落ちる」ことも、また少々軽視されているところがあります。たとえば、何か分からないテーマや事柄があったとして、それについて誰かが説明していたら、その説明を聞いただけで、もう分かったつもりになっている、といったことはないでしょうか。

とくに最近は安直に「答え」をほしがる傾向があり、それに応じてきれいに整えられた「答え」や、一見「答え」のように見える情報が、ネット空間などにはあふれています。ランキング情報やベストセラー情報などは、その最たる例です。あるいは情報がコンパクトにまとめられたテレビ番組もたくさんあります。多くの人が、まるでコンビニへ買い物に行くかのように「答え」の情報に群がり、分かった気になっています。

誰かの話をちょっと聞いただけで「分かった」と思うのは安易な解決法です。立派そうな人の本を読んで「なるほど、その通りだな」と思い、翌日に反対の意見を持つ人の本を読んで「もっともだな」と思ったのでは、意味がありません。自分の頭で考えて、本当に「そうだ、その通りだ」と腹の底から思えるかどうかが大切なのです。

㋑私自身は、人の話を聞いてすぐに「分かった」と思うことはほとんどありません。心の底から「分かった」と思えない間は、「そういう考え方もあるのだな」という状態で保留扱いにしておきます。否定もしません。結論を急いで「分かった」と言おうとするのは間違いのもとです。「腑に落ちる」まで自分の頭で考え抜いているかどうか、私たちはもう少し慎重になったほうがいいと思います。

整えられた「答え」ですませてしまうのは、そのほうが楽だからです。しかし、それは手抜きというものです。世の中のたいていの物事には、じつはすっきりした「答え」がありません。それが人生というものです。すっきりしているのは、多くの情報がそぎ落とされ、形が整えられているからです。しかし多くの場合、そぎ落とされた部分がキモだったり、形を整える際に、（道理ではなく）無理が入り込んでしまっていたりします。

すっきりしない情報をあちらこちらから収集し、自分の頭のなかで検証し、本当に納得することが、「自分の頭で考える」ということです。物事を見誤らないための、とても重要な作業です。私は、多少へそ曲がり的な性格ということもあって、子供のころからずっとその姿勢を貫いてきました。

「何となく腑に落ちないな」という感覚が少しでもあれば、安易な妥協はせずに探求を続けることが大切です。別の見方を考えてみる、さらに情報を探してみるなど、いまでは情報を探る方法はたくさんあります。探求を続けるうちに、あるところで、本当に「腑に落ちる」という感覚が得られるはずです。それが納得できたということです。

（出口治明「人生を面白くする　本物の教養」による）

〈注〉

著名な ―――― よく知られた。有名な。
科学史家 ―――― 科学の歴史を研究する人。
「腑に落ちる」という感覚 ―――― 何かが体の底にすとんと落ちるように、心に入ってくる感覚。
バロメーター ―――― 本来は気圧を測る計測器。ここでは、もの事のようすを知るもとになるもののこと。
安直に ―――― 手軽に。気軽に。
ネット空間 ―――― インターネットの世界。
最たる ―――― 最も代表的な。
コンパクトに ―――― 大切なところがむだなく簡単に。
キモ ―――― ここでは、最も大切な点や事がら。
道理 ―――― 物ごとの正しいすじみち。
無理 ―――― りくつに合わないこと。
検証 ―――― ものごとを調査して、事実を証明すること。

〈問題1〉 ㋐知ることと、知らされること について、次の問いに答えなさい。

（1） 「知らされること」とちがって、「知ること」の出発点にはどのような気持ちがありますか。**文章1** の中の言葉を使って書きなさい。

（2） 「知ること」ができたら、どのような気持ちが生まれますか。**文章1** の中の言葉を使って書きなさい。

〈問題2〉 ㋑私自身は、人の話を聞いてすぐに「分かった」と思うことはほとんどありません。とありますが、それはなぜですか。**文章2** の中の言葉を使い、解答らんに合わせて書きなさい。

〈問題3〉 あなたは、これから学校生活や日常生活の中で、何を大事にし、どのように行動していこうと思いますか。**文章1** と **文章2** 、それぞれの内容に関連づけて、四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の〈きまり〉にしたがうこと。

条件　次の三段落構成にすること。

①第一段落で、**文章1** と **文章2** 、それぞれの内容にふれること。

②第二段落には、「①」をふまえ、大事にしたいことを書くこと。

③第三段落には、「②」をふまえ、行動を具体的に書くこと。

〈きまり〉

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合は行をかえてはいけません。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。（ます目の下に書いてもかまいません。）

○。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。

○最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。